

大橋先生の講座でスタート!



有田史談会
事務局
佐賀県西松浦郡有田町上幸平1-8-5
TEL 090-4740-4752
HP arita-sidankai.sub.jp/
E-mail arita-sidankai@hotmail.com

新年度4月は大橋先生の講座を開催、昨年8月の講座以来8ヶ月振りの楽しいスタートとなつた。

今回はマルイシレストランをお借りし、午前中に前年度の締め括りとなる総会で一年の活動を振り返つた。正午から大橋先生との昼食会と楽しい歓談で過ごした後、生涯学習センター会議室へ移動し「スイス・アリアナ美術館所蔵の『力』銘の有田色絵磁器」の講義を受けた。今回は『力』の銘が何を意味するのか、興味津々でワクワクしながら受講した。

スイス・アリアナ美術館に所蔵されている江戸時代の有田磁器に世纪く世紀にかけてのものがあり、その中に「力」の染付銘の色絵磁器が1点存在している。

また、有田磁器の創始者と知られる朝鮮人陶工の金ヶ江三兵衛の5代

までは、有田で大明嘉靖年製銘が多くなるのは世紀後半で、柿右衛門窯跡出土品での銘や見込みの文様についての表現例が紹介された。これまで「力」銘の有田磁器を見たことがなく、この「力」が何を意味し誰のこのなのが興味津々で、事前の資料で大部分の内容が解つていたとはい、大橋先生の講義に釘付けになつた。

有田の磁器が、中国景德鎮窯の影響を受けながら造られてきたことは十分に想像できるが、今回の大明嘉靖年製銘が猿川窯や長吉谷窯、南川原の柿右衛門窯などで実際に出土していく大いに学習に良い機会となつた。

また、有田磁器の創始者と知られる朝鮮人陶工の金ヶ江三兵衛の5代



尾崎葉子顧問による講座は、以前からの会員の要望でようやく実現した。長年の歴史民俗資料館館長の職から離れられ、現在はお住まいである武雄市橋町で民生委員も務めておられる多忙な中での講義となつた。金ヶ江家について、三兵衛さんの墓碑について、金ヶ江家の系譜について講義いただいた。

今回はその第一回目だったが、第二回目の「有田人物伝講義」を楽しみに待ちたい。



生涯学習センター会議室にて

尾崎顧問の有田人物伝講義!

金ヶ江三兵衛とその周辺の人々

有田と古九谷のアイコンは「ハートつなぎもん」

鶴 美百合



私は、有田だけに存在すると確信していた「ハートつなぎ」ですが、実は、先日、武雄市図書館で借りて来た古九谷の本「日本の陶磁」、古九谷」1989年発行、監修:谷川徹三川端康成。この本をペラペラとめくつていって、「色絵亀甲鶴文大皿」高さ:8.5 cm、口径:43.0 cm、

私は皆様と一緒にレクチャーやフィールド・トリップで史跡探訪できることを何よりの楽しみとしています。

さて、今回も、パソコン不良の為、スマホで文字打ちとなりましたので、今度こそ、手短に参りたいと思います。

高台径10.7 cm に出会いました。

一見「ハートつなぎ文」になんの

関係もなさそうな、九谷独特の亀甲文でスルーっと通りすぎそうですが、目を凝らすと、まるで隠れキリシタンかのように青色の釉薬を塗り被せられ、ひつそりと人目をしのぶかのよう

に「ハートつなぎ文」の文様帯が五重の亀甲の形から現れたのです
♥♥♥ 皆様「ハートつなぎ」が見えましたでしょ? 一方、緑の釉薬の文様帯は拡大するとはつきりと見えますね。

したでしょ?

ハート(心臓)ではないと。あえて言

してみました。

今まで、日本では、「ハートつな

ぎ」に注目した人も文献もなく、誰

もハート(心臓)と捉える人はいない

ようです。ハートの形はしているが

ハート(心臓)ではないと。あえて言

えば、ハートの形をした「猪目」魔

除けというのが大方の意見だと思われます。誰もハートとは認めてもらえない現在ですが、この大皿「色絵

亀甲鶴文大皿」(大平鉢)の特徴を観察し推理するのは思いのほか大変楽

しいものでした。

例えば、古九谷の地紋のオン・パレードはハンパではない事。手が込みすぎでしょ!と言いたい。この文様帯を描くには膨大な時間と余裕がないとここまで精緻に描いて、独特なデザインした意匠の作品は描けませんね。

また、「ハートつなぎ」は根気強さと計算力が必要です。ハートを上下にムラなく巡らすには、割り算の計算が必要です。いきなりハートを

る事ができるのですから。♥
それで、私の「ハートつなぎ」の定義ですが、ザビエルの燃えるようなハート♥と思っています。

ハートつなぎの見本となるのは、初期の鍋島藩窯の「ハートつなぎ」です。パーフエクト均等でお見事! 描いて行つても、最後の方は必ず歪な形になります。凡帳面な絵描さんが必要。



その他は、途中で面倒くさくなつたのハートがだんだん崩れていくパターンですね。次の「花蝶文皿」の「ハートつなぎ」は赤色でわかりやすいですね。緑の「三丸文皿」は「ハートつなぎ」が隠れています。

実は、兄から借りた本に「隠された十字架、江戸の数学者たち」「関孝和はキリストン宣教師に育てられた」副島隆彦監修、六城雅敦著と表紙に書かれていましたが、加賀藩にもいた？ この本では、築城上手の加藤清正・忠広もキリストンであつた事が大きいと、えー？あれー？思いますが、まあ、数学とキリスト

数学の技が必要。なぜなら、この亀甲の線の正確さ、まるでグラフィックデザイナーが描いたようではありませんか？洗練されて優美すぎます。



ン宣教師が隠されていた事が分かる興味深い本でした。

そういうえば、鍋島藩窯にも幾何学模様の極みと思えるのが多々ありますね。

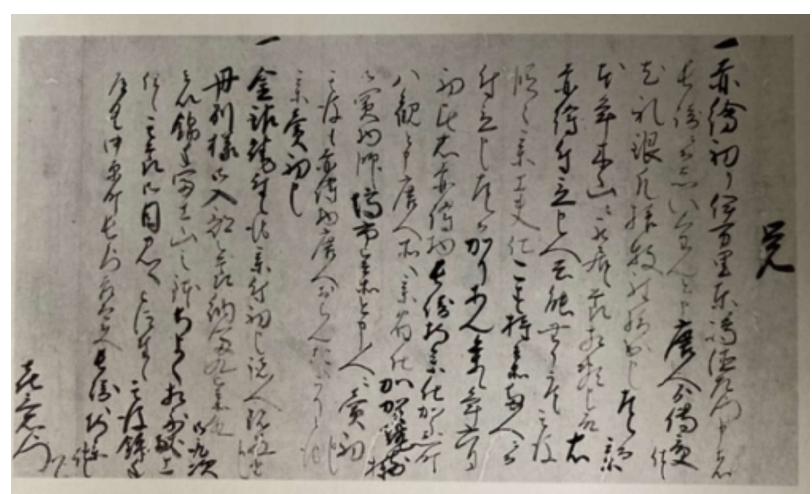
また、柿右衛門様式にも、一例ですが、黒で七宝模様を線描きし、その上に絵の具を厚く盛り上げて塗りつぶしているように思われる壺がありました。



しかし、なぜ、古九谷の皿（大平鉢）に「ハート」つなぎが見つかったのでしょうか？ 実は、柿右衛門様式と九谷様式の歴史的関わりが既にあつたと伺い知れる柿右衛門家の「覚（おぼえ）」の記述がある事は周知の通りと思われます。

「かりあん船」（ポルトガル船）が来

た年、正保三四年（1646年）の六月初めの頃、加賀筑前様のお買物師である塙市郎兵衛という人に売り始めた。と柿右衛門さんの先祖が書き残しておられます。



（岩谷川内の川 キリストン陶工高原五郎七が窯道具を捨てたという川か？）

さて、有田のキリストンにまつわる文書では、柿右衛門さんの師、先生として出てくる高原五郎七に興味が尽きないのですが、特に、寛永十年（1633）にキリストンの詮議を受けやむなく有田から姿をくらましたキリストン陶工の高原五郎七、次回の会報にご期待ください。



さて、「古九谷」とはなんぞや?と問われれば、にわか勉強で恐縮ですが、もう、今では、古九谷加賀藩はキリシタン大名抜きでは考えられないと思う程、石川県の大ファンになりました。



加賀藩三代藩主前田利常(1594-1658)と大聖寺藩初代藩主前田利治(1618-1660)のキリシタンに寛容な親子はキリシタン大名客将ファミリーらを近辺の屋敷に住まわせました。

さて、この武将たちが金沢の地にくるきっかけは、天正十五年(1587)豊臣秀吉がバテレン追放令を出した日からでした。キリシタン大名で有名な高山右近とは、社会の教科書に出てくる、「フランシスコ・ザビエル像」が発見された大坂の高槻領主でした。

キリシタンの高山右近に、豊臣秀吉は「キリシタンを捨てなければ領地没収するぞ!だから、早くキリストを捨てミヤーー!さあさあ!とおし迫ってきたのです。が、しかし、あの、豊臣秀吉に「ゾ!」と言い放ち、キリシタン信仰をとつたのでありました。パチパチ!



しかし、領地を没収され、追放され、あれ?こんなはずでは、と無一文になつた高山右近でしたが、天正十六年(1588)利家は客将として高山右近を迎え入れます。

なんと、驚くばかりなのは、二十六年間におよび手厚く保護し、一六一四年、徳川幕府によりマニラ国外追放になるまで、金沢でキリシタン生活を穏やかに過ごさせたのでありました。今では、この地は金沢のキリシタン観光名所として巡ることができます。



その後、義の高山右近の信仰の友、丹波国守護代、知(インテリ)の内藤如安(ジヨアン)様、(実は、ご子孫の内藤大(だい)氏、オペラ歌手は数年前に有田来訪されています)も金沢に受け入れられるのでありました。

そこで、茶湯が盛んな金沢にはビッグな登場人物、千利休がバツクアツプします。高山右近が金沢に迎え入れられる時に千利休は、豊臣秀吉を狂歌でおちよくなつた後、「高山右近が金沢へ向かつた、幸せめでたい」というメツセージを手紙で送つていたそうです。

また、この二組のキリシタン家族が過ごしたと思われる住居は、現在の石川県立美術館辺りなんだそうです。兼六園もすぐそこで、いい環境ですね。

驚くべきは、ここ金沢の地で、慶

長十三年(1608)、日本初での盛大なクリスマス・パーティが開かれたそうです。また、ターキーの代わりに鴨でお祝いしたとも言われ、現在でも、伝統料理として「鴨の治部煮」として残つてゐるとか。

そういえば、北陸にあつて、金沢のお醤油も甘口なんだそうです。九州有田も甘いですよね?



甘口醤油つなぎでしよう

また、茶会も開かれるのはもちろん、近くの南蛮寺(教会)では、聖歌が「グロ～オウ～オウ～♪、インエクセルシス～♪ デーエーオ～♪」と歌われ、ミサがとり行われ、洗礼時には九谷焼の「洗礼盤」を使つていたのでは?と推測いたします。このように、イエズス会報にも「金沢は日本において最も栄えた教会」と書かれてあるそうです。

まだまだ「ハートつなぎ」、驚き満載の金沢前田藩ですが、キリシタン大名の話しばかりになつてしまつたようでかたじけないです。



それでは、「ハートつなぎ文」よ、願わくば、有田と九谷を「ハートつなぎ文」がアイコンとなり、これからも、末永く繋いでいけますように!



有田皿山の川原古酒場

鶴一樹

「龍悲秘御天歌」村田喜代子著に

「地酒が充分まわり焼酎が出る頃になると、座が陽気になり歌のひとつも出始めた」と描かれている。百婆仙一族の一場面。小説ではあるが酒を楽しんで、自由に存分に飲んでいる様子がわかる。

ところが、酒事情が一変する。

一六五七年（明暦七）鍋島藩は「酒請制」を設け、高い高い運上銀を收める者にだけ酒株を許し、有田皿山は「山中にて米もとれず」と酒飲みまず働けとのたまわった。酒を飲むには脇酒といつて皿山以外から買つてきて飲むしかない。不便なことだ。

だんだん密造したり水で薄めた酒やら高く売る転売屋などヤクザ者が増え、博奕する者など犯罪多く無法地帯になつた。人の出入りが多くなると、有田焼の秘法がもれるおそれがある。九〇年間の酒ひでりから解放され「酒請け」が許可された。

一七四六年武雄の百武善次郎酒請が酒屋を始めた。運上銀納められず取り消された。次に六角（白石）黒木藤兵衛に交替。運上銀、銀十一貫匁（一七六両）酒一升百二十八文、一合十三文でスタート、月十五両ほど税に持つていかかる。儲け出ず困つて納税無理だと陳情。一七五六年、半分の六貫匁にまけてもらつていて。酒屋営むには税のほか皿山への寄付とか何かにつけ金を出し、役人様にも袖の下、ヤクザ者にはみかじめ料などの出費は、これら必要経費で税を納めたら、錢残るどころか借金だ。やつて居られないと閉店した。

そして真打ち登場。北方芦原の人で、ずっと酒造りを営んできた渡辺利右衛門。皿山で酒請になつた。代官日記では宝暦十三年（一七六三）（明和四年（一七六七）二代目源右エ衛門は、天明五年（一七八四）（文化七年（一八一〇）。一七六年、相棒の川原家は皿山に移住している。



芦原から皿山代官日記に寛政七年（一七九五）大樽山酒場善助として記録されている。法恩寺の位牌には八代としてある。大樽の川原家墓地には六代から九代までの墓がある。

八代は中興の祖。文化七年（一八一〇）二代目源右エ衛門が死んでいるので川原古酒場酒請となつた。渡辺家から川原家へ移つた。

「文化七年申渡帳」には、多数の事件の記録がある。その中に酒場での事件を記録してあるところを一、

二紹介すると、本幸平の増五郎という男、二月十四日夜酒請源右エ衛門（二代目）の店にきて酒量りの者に言いがかりをつけ大声で怒鳴り散らした。手代たちへも罵詈雑言、嗟や役人が來てもますます大声を出し騒いだ。

判決！「以前にもたびたび無法な振る舞いに及び不届き至極によつて戸閉めの刑を受けた」（増五郎はチンピラではない大物のようだ）

その後、一八一三年（文化一四）

の申渡帳に本幸平山増五郎、去年八月吉蔵とか：あちこちで因縁をつけ、役人が来ても文句を言い、その後赤絵屋彦七宅へ行き大声を出し家に病人がいるのに怒鳴りまくり、手がつけられない程騒いだ。

判決！以前「戸閉め」の罰を受ければおとなしくすべきを、また懲りず無法なことを繰り返す不届き至極。よつて居所払いの罰に處す。（居所払いとは隣に移ればよいぐらいの輕い刑か？）

酒がまわれば人は暴れたり喧嘩をしたり、日頃の鬱憤をはらす。うまく酒場を繁盛させ、明治四年の酒請制廃止まで営業し大富豪になつた。ところで川原古酒場は大樽のどこにあつたのだろうか？

京都弾丸日帰り旅!

井手 邦男

今年の五月下旬、コロナ禍明けて久方ぶりに九州を脱出し、無謀ながらも日帰りで京都まで出かけました。娘の提案で、我家の宗派である淨土真宗の本山（京都の西本願寺）で、法名をいただきに娘と娘の友人と二人連れ立って行つてきました。

私の両親も健在中に、お寺の団体旅行で西本願寺まで行き、法名を受けていた事もあり、私たちもいつか必要になるお淨土での名前を付けてもらうつもりで今回の旅を計画していました。



西本願寺 唐門（国宝）

武雄温泉駅から早朝の特急列車で博多まで向かい、博多から新幹線のぞみに乗り、京都には十一時には着事がありました。國宝の建物全体は壯大で感動しますが、建物内の廊下は時代と共に劣化があるためか、歩くたびに軋む音がする、まさに鶯が鳴いているかのような鶯張りのような廊下になっていました。

広大な敷地内には國宝や重要文化財に指定された貴重な存在となつている建物がいくつもあり、その中の阿弥陀堂と御影堂、唐門などを見る事が出来ました。國宝の建物全体は私が親子は予め自分が望む漢字二文字を法名に付けてもらうために、内願といった形で檀家のお寺を通して二か月前に申し込みをしていました。

参加者は二十二名で、お導師様が参加者一人一人の髪に剃刀を当て（剃髪することを意味する）、「おかみそり」をする儀式がありました。私は親子は予め自分が望む漢字二文字を法名に付けてもらうために、内願といった形で檀家のお寺を通して二か月前に申し込みをしていました。

法名には相応しい漢字であることが原則あるようで、査定期間も含め最低でも二か月前の申し出と決まりがありました。内願でない場合は西本願寺から名前を付けてもらうため、漢字二文字に対する意味や解釈が書

きました。京都は修学旅行の学生や海外からの観光客が目立つて多く、移動手段のタクシーが拾えないし事前の情報で把握していたので、歩きも覚悟でいました。幸運にも京都駅前でタクシーを拾えたので、目的の場所西本願寺への移動は疲れを増す事なく行けました。

初めて目にした西本願寺のスケールの大きさに圧倒されました。参拝や拝観は宗派を問わず毎日無料で、一日四回（所要時間は一時間）お寺のお坊さん自ら境内を案内するツアー「お西さんを知ろう！」があつっていましたので、西本願寺に到着すると同時に参加しました。

今回の本懐である帰敬式（おかげ）法名を授かる式は毎日午前と午後の二回行われていて、午後の部に開始される帰敬式に参加するため、指定された会場で受付を行い、案内された場所で待機していました。簡単に法名をいただけるのかと思つていましたが、事前に儀式のリハーサルが行われ厳謹な儀式があるので知り、恐縮してしまいました。



西本願寺 御影堂（国宝）

ろな埋め木の形を探し樂しめる部分もありました。若いお坊さんで、軽快な話しぶりで、建物やお寺の歴史をコンパクトにまとめた概要を知ることができました。

ところで、その初期色絵（古九谷）の魅力であるが、同じ時期である寛文期の染付（藍九谷）の魅力の項で述べたが、実際にデザインの多彩さにあらうかと思われる。初期色絵に近い古九谷は、初期伊万里の特徴である口径の三分の一の高台等を残したものもあるが、より薄つくりで、洒脱なデザインをもつものもある。

径二十cm位の中皿もそうであるが、十五cm位の小皿や向付等もまた、本当に多種多様なデザイン、形状があり、魅力を放っている。のちの精巧な柿右衛門や鍋島に至る以前の、プリミティブで自由なデザイン、色彩が特徴のように思える。

さらに青手と呼ばれている三十cmや四十cmを超す大皿ともなると、青や緑や黄色などの濃色で器面を塗りつぶしたものなどは、油絵の絵画を見るような迫力すら感じられ魅力を放っている。安土桃山期の絵のタッチが、有田の職人の描画感覚とリンクしたものがあつたんじやないかとも思われる迫力で迫つてくる。

また、同じ大皿の五彩手なども、色絵の技術を獲得したばかりの当時の陶工たちの熱い思いが、素晴らしい明るい色彩感覚と共に噴き出しているようにすら思える。

その後にやつて来る海外への大量輸出時代のなかでは、柿右衛門や金蘭豪華な古伊万里が主流になるなどで、初期色絵である古九谷は作られなくなる。時代の流れに敏感に対応してきた証左に他ならないが、個人的にはある意味、残念な思いがないではない。有田の中で、初期色絵のあの古九谷スタイルを律儀に守つて、現在も作陶している窯焼人が江戸、明治を通して今まで存在していくくれたら、そういう窯元が現在も残つていたら、云わゆる“古九谷論争”なるものは存在しなかつただろうにと思うのであるが、まあ、当時の封建下では不可能なのは自明なことで

さらには、初期伊万里の呉須で描いていた有田の陶工が、初めて色絵の技法を身につけた。嬉しくて、その絵具を思い存分使つて器面に大胆な色を載せていった、それが初期色



色絵菊鳥文大皿



色絵花卉文台皿

絵（古九谷）。後世それが洗練され、柿右衛門の美しい余白の美や、見事な鍋島の纖細な美へとつながつた。有田町歴史民俗資料館の村上伸之氏は、こう述べられている。「有田に古九谷がなければ、そこから派生する柿右衛門も鍋島も古伊万里も生まれることはなかつただろう」と。これもまた真理なのであろう。色絵の技法をもつたばかりの陶工が、最初から柿右衛門や鍋島を作ることは絶対不可能なのだ。それらとの間に、初期色絵（古九谷）があつた。有田の陶工たちが初めて色を獲得した喜びを思う存分表現した作品、それが「古九谷」だったのじやないか。残念ながら、そのスタイルは有田には残らなかつた。常に有田は時代々々に即応して変化していくからであろう。

その点は、やはり九州陶磁文化館の名誉顧問である大橋康二氏がおつしやつてているように、本当の九谷の伝世品を見つけて「これが本当の九谷です」と紹介する必要がある、というのは真理だと思う。残念ながら、未だそういうものは示されてないようだ。

善福院考（外尾町）

前田 順三



善福院山門

江戸時代古地図で安政六年（1859）以前の古地図として、慶長肥前国絵図、正保絵図、伊能図、天保国絵図等があるが、それらのどの地図にも、旧新村（後の有田村→東有田町）地区の中に唯一「外尾村」の地名だけは記載がある。

このことから、外尾村は江戸期には新村（後の有田村、東有田町）の中心であり、そこに創建された神社が「椎谷神社」であり、その地の村社として崇められたと考える。そしてその新村に椎谷神社とともに寺院

として「善福院」があつたと考える。有田町歴史民俗資料館二〇一一年九月発行の「一五〇年前の有田皿山ば歩こう隊覚書其ノ式」（以下「歩こう隊覚書」）に掲載してある外尾町地区にある神社・寺院の「善福院」の項の説明に、

この文政の大失火後、外尾村（外尾町）に移転。現在二十三世（2011年現在）。善福院は六ヶ所に末庵があつたと過去帳に記載されている。由緒の詳細は大火の為、古文書等が焼失したので不明である。寺格は准別格寺院。（参考：「蓮門精舎舊詞」より）となつてている。

参考文献として挙げてある「蓮門精舎舊詞」というのは、元禄・享保年間（1688～1736）に浄土宗寺院の沿革を全国規模で調査収録したものである。それを見ると善福院そのものが、文章は他の肥前国内の寺院の中でも比較的多くの文字数を割いている。

「歩こう隊覚書」に文政の大失火後に（上有田地区から）外尾村に移転したと書いてあることについては、確かに善福院の現在のご住職のご両親（老僧ご夫妻）からも何度かお聞きしたことがある。現在の碑古場の報恩寺近くにあつた、あるいは上幸平の三空庵広場の所にあつたであろう庵寺も前身の一つであると伝え聞いている。確かにそういう地区にあつた庵寺も一緒になつたと思われる。しかし決して善福院そのものが、文政の大失火により旧上有田地区にあつたものが旧下有田地区に移つたのではなく、母体は元から外尾村に在つ

善福院
浄土宗醫王山善福院瑠璃光寺
住吉村西福寺が武雄邑主の命により上西山（下西山の誤り）に移転、第3世住職頂誉上人は住職を弟子に譲り、有田村薬師堂を幕府の許可を得て浄土宗に改宗、藤津郡吉田村善福院の院号を被下された。

そのことから当時の松浦郡内の浄土宗寺院としては割合大きい規模の寺院であったことが窺い知れる。それによると武雄・西福寺を隠居した頂誉上人は初めから「外尾村に薬師堂を建て」るとなつていて、先に挙げた「歩こう隊覚書」の「外尾村に移転」とは相違している。安政六年（1859）の絵地図を見ても旧新村地区では唯一の寺院である。江戸時代外尾村は新村の中心地区であったであろうから、江戸時代初期に制定された「寺請制度」で現在の役場と同様の戸籍作成、住民管理を寺院が行つており、外尾村に寺院の存在は不可欠であつたと思われる。

「蓮門精舎舊詞」には頂誉上人が寺ヲ隠居シ外尾村ニ薬師堂ヲ建テル（意訳）となつていてが、有田町歴史民俗資料館所蔵の「昭和十七年以降 社寺ニ關スル例規綴 有田村役場」には「慶安二年（1649）ノ創立」

に（上有田地区から）外尾村に移転したと書いてあることについては、確かに善福院の現在のご住職のご両親（老僧ご夫妻）からも何度かお聞きしたことがある。現在の碑古場の報恩寺近くにあつた、あるいは上幸平の三空庵広場の所にあつたであろう庵寺も前身の一つであると伝え聞いている。確かにそういう地区にあつた庵寺も一緒になつたと思われる。しかし決して善福院そのものが、文政の大失火により旧上有田地区にあつたものが旧下有田地区に移つたのではなく、母体は元から外尾村に在つ



善福院本堂

らは定着していくことになると思われる。また初期伊万里の中にも藍九谷の名が使わってきたが、この名も消えていくのだろうか？興味は尽きない。

展示室正面の中央には、おおらかに描かれた初期伊万里の大皿と色彩豊かなコントラストで描かれた初期色絵の大皿が並び、一見対照的ながらも作品の魅力に引き込まれた。

特に初期色絵の大皿に施された黄色の鮮やかさに緑色が際立ち、これまで見た初期色絵と比べ印象的だった。染付の可愛い鶯や兎の吹き墨の作品が並び、素朴ながらも楽しめる作品だ。染付椿文皿は見込みの中心に椿が描かれ、回りには搔き落と



染付椿文皿 1630~1640年代



色絵牡丹文大皿 1630~1640年代

展示の解説は初期伊万里から始まつた。染付の可愛い鶯や兎の吹き墨の作品が並び、素朴ながらも楽しめる作品だ。染付椿文皿は見込みの中心に椿が描かれ、回りには搔き落と

しで白抜き線で花唐草を描き、その口縁には櫛歯文が雑ではあるがしっかりと描かれている。年代は一六三〇～一六四〇年代。この時代の製品でありますながら今時代にも違和感なく感じるのは私だけだろうか？。

鑄釉の小皿が二枚。鑄釉を搔き落とした作品で、うち一枚は二羽の鶯が描いてあり、素地を活かした作品になつてている。

初期色絵の中では何と言つても大皿が目に留まつた。色絵牡丹文大皿は黄色、緑、紫の三色を皿全体に塗り埋めた大胆な色使いの青手と呼ばれるもので、紫の花と緑の葉が一面に大きく描かれ迫力満点の作品に目を奪われた。裏面は雲氣文を青海波状に描いてあり美しい。

中でも一段と目を引いたのが色絵菊鳥文大皿。色調は紫、緑、黄色。菊・鳥を画面全体に描いてある作品で、塗り埋めた黄色のコントラストに圧倒された。

色絵花卉文台皿は唐花・葉の主様と菊花状の地文を黒で描いてあり、唐花は青、葉は黄色、地文緑で塗り埋めて、やや灰色を帶びた素地の裏面には三方に折枝菊文が描かれている作品。大胆な構図が素晴らしい。



色絵牡丹文大皿 1630~1640年代

今回の寄贈展で公開された初期鍋島は六枚。うち色絵紗綾形文葉形皿と色絵花文瓜形小皿は裏面は無文であるが、献上品鍋島の生産は岩谷川内で始まっており、当時の特徴を有していることから草創期一六五〇年代頃の作品として紹介されている。

佐賀藩窯は寛文年間（一六六一～一六七三）頃に有田から大川内山に移転しており、移転前の岩谷川内で創られた作品として興味深く鑑賞した。

また、色絵椿繫文小皿の背景は墨弾きによる白抜きの染付七宝繫文で埋められ、椿の花の上絵の赤が印象的な作品であった。

一六一〇年代頃に肥前で磁器生産が開始されるまで、日本において磁器は高級な食器として主に中国から輸入されるものであった。日本市場向けに作られたとみられる祥瑞などの例はあるが、国産磁器の開発を契機に、日本国内の需要を反映した製品が生産可能になったといえる。国内外に生産されたとみられる本コレクションの作品からは、そのデザインを通じて、当時の人々の好みを窺い知ることができよう。コレクショ

久巣由季子学芸員の図録から



ンの核である初期伊万里、初期色絵、初期鍋島は、いずれも「初期」を冠する。十七世紀前半に生産された日本本の磁器のはじまりである初期伊万里、その後十七世紀中葉に開始された初期色絵、将軍家の食器として開発され、献上されはじめた時期の初期鍋島には、様式が定まらない草創期にのみ現れる自由で多彩の雰囲気を見ることが出来る。

旧有田町内のお寺の歴史

大串 和夫

お盆の季節を有田では迎えるが、

七月盆は県内では他に嬉野市の一
部だけであり、全国的には八月盆が一
般的である。江戸期は、お盆は旧暦

(太陰暦)で満月になる七月十五日
ごろに全国で行われていたが、明治
五年の新暦(太陽暦)採用以来、多
くの地域では次第に旧暦の七月十五
日に近い八月十五日頃にしたとのこ
とである。有田では、明治三十九年

の有田村役場日誌七月五日付、お盆
を新暦に改める為、村會議員と区長
との協議が行われた。(佐賀新聞)

せつけられ候

開基 慈海 第二世 泰林

第三世 惠燈

・臨濟宗

宝洞山 桂雲寺 本幸平山

武雄の広福護国禅寺の支配で、聖

一国師(一一〇二~一二八〇)の開
堂で、開基は不明

・天童山 極楽寺 大樽山

前段階には、品質の高い製品の開発
を目指しながらさまざまな技術が試
みられ、技術が確立し洗練されてい
く中で選ばれなかつた技術も初期の
作例に見ることができる。赤戸幸コ
レクションは、そうした興味深い初
期の製品の中でも質の高さと多彩で
自由な雰囲気をあわせもつ製品を選
び抜いて形成されている。

今回の赤戸幸コレクションの作品
の殆どが、有田で磁器生産が始まつ
た草創期のものであり、約四百年の
時を超えている作品を見てあらため
て感動した。地元にいることで、日
頃から見慣れているとはいって、寄贈
展で貴重な作品に出会えたことに感
謝したい。

江戸時代後半期の有田の寺院は佐
賀本藩の寺社方に提出された由緒書
によると左記の通りである。

幕府は慶長十七年(一六一二)キ
リスト教の禁止とともに、すべて
の人を寺院に所属させた。寺は宗
派ごとに宗門法度によって規制、本
山・末寺という支配体制ができ、毎
年宗門改めが行われている。

江戸時代後半期の有田の寺院は佐
賀本藩の寺社方に提出された由緒書
によると左記の通りである。

「当寺儀は何年に何某が建立と申す
武雄の円応寺支配である。

・曹洞宗
慈雲山 報恩寺 碑古場山

開山、開基ともに不明で、寛政年
間には桂雲寺が掛け持ちの無住の寺
となっている。現存せず?



陶器祈願所となっている法元寺

小城の松尾山光勝寺の末寺である。
由緒書によると、もともと杵島郡筒
江(武雄市山内町)にあり、江瑞山
と称したが光勝寺の第十九世日億
上人が有田に移転し、光瑞山と改称
した。法元寺が有田に移ったのは、
日億上人の遷化の年などから推定し

儀、筆記御座なく候故、相知れ申さ
ず」としながらも、開山は明暦四年
(一六五八)六月入院、「開山より七
代何年ずつ住職仕り候也、筆記これ
なく候故相知れ申さず」八代現在桃
岩、明和八年(一七七一)十一月入
院仕り、当年迄十八年に相成り申し
候」と報告している。報告したのは
円応寺大祐で、日付け天明八年(一
七八八)十二月である。

・日蓮宗(法華宗)
光瑞山 法元寺 赤絵町

て、寛永の初め頃ではないかと思われる。

松尾山光勝寺から寺社奉行所に提出した「末寺現在寺」によると

一、屋敷六畝十八歩 松浦郡赤絵町
御物成地 法元寺
同十步 岩谷川内山 同寺末庵
右同断 觀音庵

右同 松浦郡 下南川原山
同寺末庵
下南川原山

法元寺は元文元年（一七三六）佐賀藩から「山中繁盛・諸災転除」の勤行を命ぜられ、陶器祈願所となつてている。

・淨土宗

医王山 瑞璃光 寺善福院 外尾町

筑後 善導寺の末寺であるが四カ所の末庵を持つていた。

隠居庵 岩谷川内山

広福軒 碑古場山

阿弥陀堂 中島（上有田の字名）

福泉庵 上南川原山

文政の大火灾後、外尾村（外尾町）
に移転

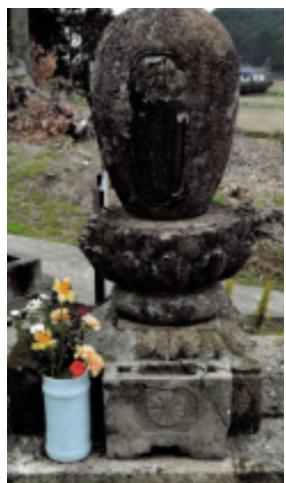
・淨土真宗

紫雲山 淨真寺 戸矢

明治二十九年六月二十九日社寺公



龍造寺氏の家紋「十二日足」



参考文献等

・有田町史 政治・社会編1

・有田町史 陶業編1

・明治二十九年六月二十九日付

・佐賀新聞陶片物語「珍しい七月盆」

歴史民俗資料館長 村上伸之
令和五年八月十一日付

社寺公認願

（有田歴史民俗資料館蔵）

有田のトレードマーク（商標）

馬場 正明

二重の四角のワク内に草書で「福」を表示した「角福」マークは柿右衛門窯の商標です。この商標が初めて登録された頃の状況を、十二代柿右衛門の聞き書き「赤絵有情」から見てみます。

柿右衛門の商標が登録になつても、よその窯では従来通り角福のマークを使う、そこで「角福」の商標は使つてはいけないといえ、逆に「角福」を柿右衛門が専有するのはおかしいと訴え、明治の末頃まで訴訟が続いたが、先願主義をとる商標法により角福の商標は柿右衛門窯の専有となつた。

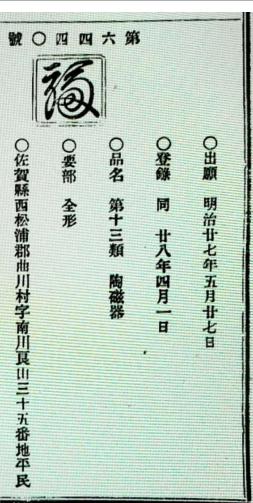
柿右衛門の商標が登録になつても、よその窯では従来通り角福のマークを使う、そこで「角福」の商標は使つてはいけないといえ、逆に「角福」を柿右衛門が専有するのはおかしいと訴え、明治の末頃まで訴訟が続いたが、先願主義をとる商標法により角福の商標は柿右衛門窯の専有となつた。

田近辺のあちこちの窯では焼きものの銘に使用し、柿右衛門窯でも七八代の時分はたくさん使っていて、十一代の柿右衛門が明治十八年角福の銘を商標登録した。

商標制度の発足当時からの商標登録のデータを蓄積する特許情報プラットフォームには、明治十八年の柿右衛門のデータは見られないが、登録番号に該当項目が無い所謂欠番が数ヶ所あるため柿右衛門の商標登録のデータも紛れ込んでるのではないかと思われる。因みにその十年後の明治二十八年に「角福」のマークが第六四四〇号①で更新登録されている。

「角福」のマークは、もともと中国の陶磁器によく使つたもので、四角のワクの中にも福の字を書いたマークで、ただおめでたい意味だったのでは、日本でもこれをまねて焼きものに書くようになった。

四角のワクが一重だつたり、二重だつたり、福の字の書体が楷書だつたり、草書であつたりでこれらを有



このような状況を見てか？おめでたい意味の「富」の字を四角のワクの中に表示した「角富」の銘が第六七九〇号②で瀬戸口勝太郎により商標登録されている。



それから百年過ぎた現代、有田町に住む人の商標は特許庁の特許情報プラットフォームで調べると、

(株) 柿右衛門窯
「柿右衛門」の商標第四八三一八八五号
「角福」の商標が第五二五一九九三号
「乳白手」の商標が第五〇一二二三三一号

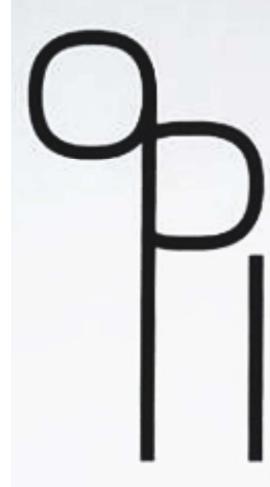
酒井田柿右衛門
「濁手」の商標が第四九五八七八一号

今泉今右衛門

有限公司 しん窯
德永陶磁器 (株)

「幸楽窯」の商標は第六四四四七五四号
「SMART CERMIC」の商標第六一二二九一六

四号



それぞれ登録されているが、随分おおくなつたものだ。

(株) 源右衛門窯
「源右衛門」の商標第六五五九一一〇号

有限公司 篠原溪山
「渓山」の商標は第六六一三三五六四号④

有限公司 久保田稔製陶所
「久右衛門」の商標第五七四〇一三一六号

いつまで会報の編集作業を続けていけるのかと最近になり気になり始め、今のうちにこれまでの会報を一冊にして記念の本にしようと思い立ったが、始めて見ると結構な仕事量である。次回の会報発行までの半年間に下準備を済ませ備えないと今月から早々に編集作業を開始している。



あとがき



高島豆腐店
「有田のこじらうふ」の商標
第四四五八八〇〇号⑤



高島豆腐店
「有田のこじらうふ」の商標
第四四五八八〇〇号⑤

毎年一回の会報発行も恒例化してきたとはいっても、投稿される方々の中には負担になっている人もいると思う。私自身、今まで苦にならなかつた些細なことも年々歳を取り面倒になるこの頃だから、皆様のご苦労も身近に感じてしまう。

